

世界遺産登録に向けて

西三川砂金山(3) — 黄金の島のいわれ —

永享8(1436)年2月、世阿弥は佐渡に配流されてから約1年半後に『金島書』を著します。そこには、「されば北野の御製にも、かの海に金の島のあるなるを、その名を問えば佐渡というなり」と、のちに天神様と呼ばれる菅原道真(845~903)の歌が紹介されており、すでに9世紀末頃から佐渡の黄金が注目されていたことがわかります。

平安時代から中世後半までの西三川砂金山の遺構は確認されませんが、『今昔物語集』や砂金発見伝説にあるように、砂金を求めて、西三川や小佐渡の山々を移動する多数の一団がいたことがうかがえます。

『佐渡相川志』には「凡ソ金山ノ起リ西三川ヨリ先キナルハナシ。西三川砂金山ハ寛正三庚辰年始マル(千支からすると元年の誤りか)」とあって、『金島書』が著されてから20年余り後に組織的な開発が始まったことがわかります。

大規模な開発が始まるのが弘治元年(1555)年。松浪遊仁なる者が、この地を稼ぎ始めます。信長が清洲城に進出し、信玄・謙信が川中島で雌

雄を決していた頃でした。

遊仁は、西三川の井ノ上沢にあった諏訪神社の社領田を掘りつくし(「小立諏訪神社由緒」、公納のほか毎日砂金を2匁4分(約9g)稼いだと『佐渡古実略記』に記述されています。

ところで世阿弥は、『金島書』に書き残した筆跡が、黄金のように朽ちることなく後世の人々に伝わるのだらうかと、「これを見ん 残す金の島千鳥跡も朽ちせぬ 世々のしるしに」という歌を詠んでいます。

◆市役所世界遺産推進課(金井就業改善センター内) ☎63-5136



松浪遊仁が稼いだとされる井ノ上沢

3つの資産について、関連あるの?!

11月2日に『よくばり!3資産満喫ツアー』を実施しました。3資産とは、佐渡市が進めている世界文化遺産、世界農業遺産(GIAHS)、ジオパークの世界的な3つの資産を指します。

36人が参加したツアーは、これまで別々に見学することが多かった佐渡金銀山から二見半島を巡り、ジオパーク(大地・地球)によってひとつのストーリーで繋げることを目的としました。

佐渡金銀山の鉱脈は、約2千万年前に陸上で起こった火山活動によって形成されました。金銀鉱脈の形成とともにまわりの岩石は熱にさらされ、石が緑色に変化しています。大佐渡から二見半島の海岸に緑色の石が多いのは、大昔の火山活動によるものなのです。

二見半島では、火山岩類が海底から持ち上がった段丘地形が見られます。段丘を利用し、多くの水田が昭和初期に開かれました。一部の水田は、金山開発による人口増加の食糧不足を解消するために開墾され、水のくみ



二見半島のため池

上げには金山でも使用された水上輪が利用されていました。また、中山トンネルに沿って断層が走っているため、二見半島は大佐渡からの水がほとんど供給されません。そこで人々は、わずかな水を確保するために多くの「ため池」を作り、田に水を供給するだけではなく、多様な生物が住める環境も生み出しました。「ふゆみずたんぼ」には、トキなどがエサを求めて訪れます。このような生き物を育みながら進める農法が世界農業遺産(GIAHS)に評価され認定されました。

参加者からは、「自然を感じる事ができ、この自然こそが資産だと思つた。」「3資産を組み合わせたツアーは個別で見るとよりわかりやすかつた。」などの感想が聞かれました。

佐渡に金山があることや、二見半島にため池が多いことは、佐渡のなりたちから紐解くこともできます。大地に目を向けることで今まで別々に見ていたものが繋がり、佐渡の面白さが倍増していくようなツアーを今後も企画していきたいと思えます。

◆教育委員会社会教育課

ジオパーク推進室(佐渡博物館内)
☎52-2447



佐渡ジオパーク

ジオパーク、推進日記

44